



この度高野前会長の後を受け、日本膜学会会長を務めさせていただくことになりました。このような長い歴史と伝統のある日本膜学会の会長に就任するに当たり、その責任の重さを痛感しております。歴代会長の先生方のお顔を思い浮かべるにつけ、この役目が私に務まるかどうか、はなはだ不安に思うことも多くあります。どうか皆様からのご指導やご協力をいただければ幸いに存じます。

日本膜学会は1978年の発足から約39年の歴史を持ち、これまで数多くの実績をあげてきました。欧州膜学会よりも歴史があり、第1回の国際膜会議（ICOM, International Congress on Membrane and Membrane Processes）は日本で開催されました。しかしながら、現在個人会員数や企業会員数は減少傾向にあります。また公式の行事である年会や膜シンポジウムでの発表件数や参加者数は顕著には増加しておらず、ICOMやAMS（Aseanian Membrane Society）における発表件数は、アジアに於いて中国、韓国に続く3番目となっています。

私は下記のように、日本膜学会の独自性の明確化、活動の活性化および会員増強の促進を行っていかねばと思っております。

1. 独自性の明確化

日本膜学会では、人工膜と生体膜の融合を目指しており、これは世界の膜学会を見渡しても我々の学会のみの取り組みです。2013年の第35年会では、高野先生のご尽力により特別企画「生体膜と人工膜の研究融合のための相互理解に向けて」が開催されましたが、今後ともこのような企画を引き続き、年会や膜シンポジウム時に開催すべきと考えます。人工膜と生体膜の融合は容易なことではないと理解していますが、そうであればなおさら、積極的な活動を持続的に行うことが必要と思えます。

2. 活動の活性化

春の年会と秋の膜シンポジウムに加え、さらなる活動が必要に感じています。今年度より東京農工大学の橋先生を中心として、膜学若手研究者の会が発足しました。このような若手の方の活動に大いに期待しています。また海外の著名な研究者を招へいすることによる国際シンポジウムの開催や、他学会とのジョイントシンポジウムも開催できれば興味深い試みになると思えます。世界における膜学会の盛況ぶりや、日本の膜関連企業の活躍を鑑みると、日本膜学会の年会や膜シンポジウムの参加者が250名程度に留まっていることは非常に残念であり、300名超の規模の活動への発展を目指すべきと思えます。

3. 会員増強の促進

企業会員数が余り多くない状況と言えます。企業の方にさらに積極的に年会や膜シンポジウムにご参加いただく必要がありますが、そのためには、企業からの要望が強い、よりアカデミックな内容である大学教員による基礎解説や研究動向の紹介、また逆により現場に近い内容として、少なくとも10社以上の企業のみからなる講演セッションの開設等が必要ではないでしょうか。もう1つは若手会員の増強です。若手研究者の自主的な学会参加を促進するようなより魅力的な学会への変貌に加え、若手研究者へのPR活動も検討する必要があります。

都留元会長の舵取りで発足した産業部門委員会の活動をさらに進展させる目的も持って、今年度から新たに産業界から熊野氏に日本膜学会副会長に就任いただいております。また今年の年会では、高野前会長・岡村組織委員長のご尽力により、初めての試みである企業によるランチョンセミナーも実施されました。さらに前述の膜学若手研究者の会の発足も新たな活動と言えます。他の学会も今は種々の変革を急速に行っているように感じます。我々日本膜学会におきましても、前向きな議論を基に、積極的に新たな活動を開始すべきと考えます。

最後になりましたが、会員の皆様から様々なご意見を頂きながら、日本膜学会のさらなる発展に貢献させていただければ幸いに存じます。今後の活動に対しまして、より一層のご支援、ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。